



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

66



2021.3

総人・人環 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

何をやってきたのだから.....	田邊 玲子.....	2
わが青春のアルト・ハイデルベルク	壇辻 正剛.....	4
お詫びと感謝の弁から——そして若干の感想を	江田 憲治.....	6
自由と寛容の精神	大川 勇.....	8
エッセンス・オブ・京大に触れた6年間	増井 正哉.....	10
「大地変動の時代」に入った日本列島で賢く生き延びるために.....	鎌田 浩毅.....	12

故 石原昭彦 教授 追悼

石原昭彦先生のご逝去を悼んで.....	神崎 素樹.....	14
可惜夜に ～故石原昭彦教授、熱意と楽しさと好奇心と～	田中 真介.....	15
石原昭彦先生を偲んで.....	久代 恵介.....	16
石原昭彦先生を偲んで.....	永友 文子.....	16
石原昭彦先生が大切にされていた宇宙研究.....	萩生 翔大.....	17

ご退任を迎えられる先生方から

何をやってきたのだから

田邊 玲子

(総合人間学部 人間科学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



京都大学教養部に着任したのは、1989年4月だった。それからなんと32年、長居をしてしまったものだ。たまりにたまった書類を片付けていると、出てくるわ、出てくるわ。すっかり忘れていたことが次々とふつふつと水面に浮かび上がってくる。さながら抑圧されていたものの回帰。

京都大学には、女性教官懇話会（現・女性教員懇話会、以下「懇話会」）というものがあって、着任してから会合の案内はあったのだが、なんとなく近寄りがたくて出席をためらっていた。そうしたなか、1993年に、京大における重篤なハラスメントについての新聞報道があった。当時の懇話会代表の小野和子先生がこれに迅速に反応して、総長に要望書を提出するなどの行動を起こされた。そうした時期の会合に私はこのこ出かけていって、何かお手伝いできないでしょうか、と申し出た。下働きでも、という程度だった。それが代表を引き受けることになってしまった。着任して数年の助教授でしかなく、なにより先輩方がいらっしゃるのに、何故私ごときが。当時京大の女性教員は本当に少なく、1993年4月1日時点で、医療短期大学を除くと、全学で教授4、助教授13、講師6、助手64名だった。懇話会の活動に参加されている先輩方は助手の方がほとんどで身分が不安定なのに対し、あなたは助教授だから身分は保

障されている、多少大学にたてついても大丈夫（正確な表現は覚えていないが、だいたいこのような趣旨だった）だから、あなたしかできる人はいない、と、申し渡された。このように言われては断りようもなく、若輩者ながら大先生からバトンを受け継ぐことになった。右も左も分からないながら、先輩方とともに懇話会としてハラスメントの問題に取り組み、1994年にはシンポジウムを開催し、1995年度の京都大学学内教育特別経費で研究経費を与えられて、女性教員と女子卒業生に対して調査を行った。シンポジウムはなぜか立て看が二度も「消失」したうえ、当日は台風と重なって、来て下さる方はいるだろうかと不安だったが、学内外から多くの方に参加いただき、この問題に対する関心の高さを肌で感じた。調査の方は、当時は定例であった懇話会と総長との懇談で、大学による実態調査の実施を要望したところ、学内教育特別経費を申請して懇話会で行ってはどうか、という提案を総長からいただいた。とんだ藪蛇？ではあったが、多くの方との共同作業の結果、1996年3月に報告書を出すことができた。

これをどうすれば多くの方に知ってもらえるか、と考え、記者会見をしよう、ということになった。「京大記者クラブ」に案内を置いておけば、記者がきてくれる、という情報を得て、会見を設定した。当日、本当に誰か来てくれるのだろうか、と不安だったが、思った以上に記者の方々が来て下さり、新聞等で報道された。報道されるといろいろと反響があり、学内外から直接相談や告発が

寄せられることもあった。研究室の書類を整理していると、そうしたものも出てきて、相談や告発は受けても具体的には何の役にも立てなかった、あの頃の苦い思いが記憶によみがえってきた。

総合人間学部では、長年にわたって全学の同和問題委員会委員を務めていらした池田浩士先生が主導なさって、どの学部にも先駆けてハラスメント防止のガイドラインが作成された。その池田先生から同和問題委員会委員を譲られ？て、長い間務めることになった。一時期京大では「差別落書き」が頻発し、大学側の対処の問題もあって、学生側の要求を受けて「事実確認会」が開かれることになった。前方に委員が並び、学生側から糾弾される、という格好であったが、教員側もこの問題と真摯に取り組み、委員同士の会合を何度も開いて議論を重ね、誠意を尽くして対応した。準備も大変で、おまけに学生側に頭ごなしに怒鳴りつけられるなど大変ではあったが、他方、ああこれが例の「団交」か、と妙に楽しくもあった。ここで私たちが大前提としたのは、何があっても教員が矢面に立つ。事務職員の方にはあくまでも連絡役に徹して学生とは良好な関係を維持していただく。それによって大学側と学生側との相互の信頼関係を築く、ということだった。中心となって私たちを「糾弾」した学生は、学内で偶然出会ったりすると、笑顔で寄ってきて、あの会では自分の役目なのであのような言動をとっていることを理解してほしい、先生方個人に敵意を持っているわけでは決していない、といったようなことを話してくれた。彼なりに気になっていたのだろう。彼が卒業する頃には、無事就職が決まったことをわざわざ報告してくれたりもした。

差別落書きについては、発生した場合、その部局および全学に広く知らせ、落書きの確認や対処を事務職員任せにするのではなく、教員が責任を持って行うこととなった。学生からの圧力に負けたわけではない。彼らの要求にもしごくまっとう

な部分があり、それが採用されただけである。落書きは旧教養部構内で頻発したので、ある時期私は毎月のように総人の教授会で差別落書きの報告をし、広報に掲載する警告文？を書いていた。落書きの確認も教員が、というのは当然ではあるけれど、ある時男子トイレに落書きが見つかり、ちょっとそれは…と尻込みしたものの、当時の事務長さんが、いや、やはり先生に見ていただかなければ、と譲らない。仕方なく、落書き確認のため入ります！とかなんとか大声で叫びながら、男子トイレに入っていった覚えがある。その場にいた人たちはびっくりしただろうし、一種のセクハラかもしれないけれど、反対に、女性に男子トイレを確認しろ、というの、やはりセクハラになりかねない。ただ、「だから女は」などと言われたくないがために、つまらない負けん気を出してしまった。あのときもう少し強くかつ論理的に抵抗すればよかった、と思えど後の祭り。

もちろんこうしたことだけがすべてではない。個性豊かな学生や院生たちと出会い、苦楽？を共にし、むしろ私の方が教えられ鍛えられてきた。今年度のオンライン授業でも、資料に何か間違いがあると即座に誰かが問い合わせてくるし、いろいろ質問や指摘がきて考えさせられることも多い。最後まで気が抜けない、それが京都大学における授業であり、楽しかった。赴任してから32年間、学生や院生に恵まれ、事務職員の皆さんにも恵まれ（ご迷惑をおかけするばかりだったが…）、同僚にも恵まれ、充実した時を送ることができた。ただただ感謝するばかりである。ただ一つだけ心残りがある。私が辞めるまでに戻ってくることができなかった学生の件である。不器用な生き方も悪くはないかもしれない。けれど、心残りである。

（たなべ れいこ）

ご退任を迎えられる先生方から

わが青春のアルト・ハイデルベルク



ハイデルベルクはネッカー川沿いに佇む大学街である。ハイデルベルク大学は京大との縁も深く、京大の欧州拠点ハイデルベルクにあり、逆にハイデルベルク大学の京都拠点は京大の吉田南

構内にある。疎水沿いに「哲学の道」があるように、ネッカー川沿いには「哲学者の道」もある。

ハイデルベルクは幾度か訪れる機会があったが、やはり一番印象に残っているのは最初の訪問時のことである。当時はまだ東西冷戦が終結していなかったが、東欧で開催された国際会議の後に立ち寄る機会を得た。発表を終え鉄のカーテンからも無事帰還できて、緊張から解放され、安堵感と高揚感に包まれていた。

ハイデルベルク大学はドイツ最古の大学として有名であるが、そのハイデルベルク大学を舞台にした戯曲 *Alt-Heidelberg* は我が国ではそのまま『アルト・ハイデルベルク』として邦訳されている。この物語を読んだのは子供の頃であるが、その甘く切ない物語には、幼いながらも心を痛めたものである。英語圏では *The Student Prince* としてよく知られているが、その英語劇がハイデルベルク城の中庭で上演されていた。宵闇迫る中世の廃城を背景に上演された野外劇は、観るものを夢幻の世界に惹き入れる魅力に満ちていた。馬車のシーンで、本物の馬車が地響きをたてて疾走してきたのには驚かされた。野外劇ならではの演出であろう。

夕食はハイデルベルクの旧市街のとあるレスト

壇辻 正剛

(学術情報メディアセンター／
総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

ランでとった。前庭に噴水があり、虹色にライトアップされる噴水が見える屋外のテラス席で夕食を楽しんでいた。虹色に輝く噴水を眺めていると再び夢幻の世界に惹き込まれるようであった。いつの間にか学生時代のことを想い出していた。

現在の総人棟や人・環棟の立つ吉田南構内には、私が入学した頃には、旧制第三高等学校（三高）時代の本造校舎がいくつか残っていた。私達はその古い学び舎に入ったこともないのに何となく愛着を感じ、郷愁を感じていた。それは父から旧制高等学校時代の寮生活の話を幾度となく聞かされて育ってきたからかもしれない。

それはともかくとして、私達が何とか保存したいと考えていた三高の校舎群も、かつてそこで学んだことのある教授の先生方には頗る不人気であった。そこでの生活は快適とはほど遠いもので、特に京都の厳しい冬の寒さには耐えかねて、教室や廊下の羽目板をはずしては火にくべて暖を取っていたとのお話があった。先生方が積極的に取り壊しを推進されていたのには、何だか気が抜けてしまい虚脱感に襲われたものであった。

専門課程に進んでも同じようなことを経験した。薄暗くて湿っぽかった研究室のあった文学部の旧館は古い煉瓦造りの建物であった。穴蔵のような研究室は、夏は蒸し暑く、冬はスチームを最大にしても暖かくはならなかった。快適とはほど遠いものであったが、満足して毎日研究室に籠っていた。しかし、先生方は建て替えに積極的であった。今から思えば、先生方のほうが進取の気性に富んでおられ、私のようなものは時代遅れのような存在であったのかもしれない。そう、私は入学した時点ですでに時代の波に取り残されていた。

高度成長やバブルといった世間の風潮にはひたすら目を閉ざし、研究室と実家、あるいは研究室と下宿を往復して音声分析に没頭するだけの日々で満足していた。

研究室の先輩方も、時代の先端とはほど遠い不思議な雰囲気かを漂わせていた。書籍や論文は風呂敷に包み、ジーパンに下駄という装いで研究室に通われる先輩方が多くいた。最初はいつの時代にタイムスリップしたのだろうと不思議な感覚に襲われたが、いつしか自分も同じような身なりになっていた。テレビも見ず、ラジオも聞かず、新聞も読まなくなり、今のようにインターネットも普及していなかったのも、時の首相も内閣も知らず、世間の動きにも無頓着になっていった。

お正月を除き、ほぼ毎日研究室で過ごしていた。先輩の中には、元旦も研究室に行き、鍵を借りに行った用務員さんから「今日ぐらいは勘弁してえな」と愚痴られたと仰っていた方もいたぐらい、研究室で過ごすのが日課になっていたし、快適でもあった。それらの先輩方でも、夏のお盆休みには一週間ほど地方の実家に帰省されていた。私は大阪なので「帰る必要はないだろう」と言われて、休むことは認められなかった。この時ばかりは地方出身の先輩方は息抜きができてうらやましいと思ったこともあったが、あまり苦にはならなかった。研究室で過ごすというのが一つの習慣になってしまっていたからだろう。ただ、いつも顔を合わせふざけあっていた先輩方がいないというのは、ひどくつまらなく、寂しく感じたのを覚えている。

印象に残っているのは、新たな研究室メンバーとしてコンパの席で教授の隣に座らされたことだ。教授は何回か空のグラスを私の前に差し出されたのだが、下戸の私には何の事か判らず、無視していた。教授はとうとう痺れを切らして、「ビール注いでもらえるかな？」とおっしゃった。あろうことか、私は「アルコールは身体に悪いですよ」と言い放って注ぐことを拒否した。教授は怒りもせず、「君の飲んでるジュースのほうが、合成着色料とか含んでて身体に悪いのん違うか？」と仰った。私は「そしたら、こっち飲みますわ」と言って、白濁色の健康飲料を飲もうとしたが、教授は

「それの方がもっと得体が知れんやろ」と仰って笑われた。私は何を言っても怒りもせず、ニコニコ笑いながら反論してくる教授を見て、「気さくな教授でよかったな」と思っていた。しかし、周囲の先輩方はいつ教授の怒りが爆発するか冷や冷やしていたようで、次回からは遠く離れた席に座られるようになった。

その遠く離れた席で、すき焼きコンパの時に隣に座った院生の先輩が「君な、ちょっと物々交換せえへんか？」と言って交渉してきた。私は「そら来た、世間で言う先輩の後輩イビリや。牛肉を持っていくつもりやな」と思って緊張して身構えた。しかし、それに続く先輩のことばは意外なものであった。「僕の肉と卵をやるから、君のネギと豆腐をくれへんか？」

私は思わず自分の頬をつねった。「世の中にこんな美味しい話があるだろうか？何かの聞き間違いか、あるいは自分の幻想ではないか？」と思い躊躇していると、先輩は「やっぱり嫌か？そらそうやろな」と仰ったので、慌てて「交換します。交換します、喜んで！」と言って、先輩にネギと豆腐を差し出した。先輩は「悪いな、スマンな」と言って、嬉々としてそれを受け取り、自分の肉と卵を下さった。

私はその時、「何があっても、この先輩について行こう！」と固く決意した。その後コンパの度に先輩の隣に着席し、有難く肉と卵を頂戴したが、研究上は先輩と同じ道に進むことはなかった。

そうした恩師や先輩方も、一人、二人と京大を去って行かれた。そして、今、私も巣立とうとしている。想えば、私たちの学生時代はみんな貧しかった。しかし、京大にはそれを補って余りある自由と浪漫が溢れていた。夢を見ることができた。しかし、今、その面影はどこに行ってしまったのだろう。気が付いてみると、温もりのある木造校舎や瀟洒な煉瓦造りの学び舎はいつの間にか姿を消していた。無機質なビルに建て替えられて、どこにそれがあるのか分からない。どこを探せばよいのか分からない。いつの日にか、新生の自由に充ちた吉田の地を逍遙できればと願っている。

(だんつじ まさたけ)

ご退任を迎えられる先生方から

お詫びと感謝の弁から——そして若干の感想を

江田 憲治

(総合人間学部 国際文明学系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



退職に際し、広報誌『総人・人環広報』に一文を、とのお申し出を受けたのはずいぶん前のことなのですが、いざパソコンを前にすると、何を書

けばいいのか、頭を抱えてしまいました。生来の能力不足と不注意のゆえ何をやっても事務のみなさんと同僚たちに迷惑をかけ、手数を煩わせて来たからです。十数年ほど奉職致しましたので、「長」とか「主任」の名が付く役職にも就きましたが、失敗だらけで、何一つ皆さんの御助力と御寛容なしには任を終えることができませんでした。これは自虐ネタでは決してありません。おまけに学部・研究科のため何か貢献できたのか、といったことを思い返しても、全く心許ない次第です。私の研究室で学位を獲得した学生の皆さんの研究の「質」を誇ることはできるのですが、アカデミック・ポストに就いた学生の皆さんの「数」を誇ることは残念ながらできません（一人だけ人文科学研究所の客員准教授職に就きましたが、惜しいことに早くに亡くなりました）。

十数年前でしたか、M省が行った大規模な研究拠点形成プログラム（COE）に参画しようとしたのですが、協定まで取り交わして手を組んだ筈のB研究科は、M省への申請書類からわたくしたち

の研究科の名を省いてしまいました（私は下げた頭を土足で踏みにじられる思いをしました）。

みなさまへのお詫びと感謝を字面で申しあげても詮無いこと、退職のその日までに、皆さんのお一人おひとりに頭を下げたいのですが、こうした環境下にそうした機会が果たして得られるのか、大変心許なく思います。ですので、失礼は承知の上で、あらためてこの場で申します。皆様のおかげをもちまして、退職の日を迎えることができました。あらためて、お力添えに感謝を申し上げます。

さて、さりとてこうした反省文だけでは、「かたち」にならないかと思いますので、少しでも昔話をさせていただこうかと思います。私は、入学して以来2年間を過ごした教養部で（たぶんあの頃は「吉田南キャンパス」という言い方はなかったと思います）、今日まで勉学の対象としている中国近代史に出会いました。

当時、「東洋史」を開講されていた堀川哲男先生の授業をE号館（四共）の階段教室で受けたのです。以後も史料講読や英書講読の授業に出させていただき、先生の著書や翻訳書を通じ、中国近代史の概略を知ったと言っても過言ではありません。今でも先生が話された講義の口調が耳に残っています。ある時の講義で先生は、太平天国の指導者・南王馮雲山の「温かい」人格が初期太平天

国に団結をもたらしたと説明されたのですが、私にとっては堀川先生こそが馮雲山のような「温かい」恩師でした。また堀川先生は、天安門事件（1989年）後には、「関西・中国人留学生の人権を守る会」を結成し、民主化を支持していた中国人留学生が強制送還されることのないよう市民運動を起こされました。その後、まもなく若くして亡くなられたのですが（私もこの運動に加わりましたが、恥ずかしながらそれは先生の没後のことです）。京都大学に戻ってきた際、この堀川先生が研究室を持たれていたA号館（総合館）の同じ4階に居室を頂戴できたのは、やはりうれしいことでした。

こうして自分が1回生・2回生であった時期に受けた教育を思い返してみますと、中国語の授業は、同僚の赤松先生・道坂先生たちに開発していただいたweb教材のおかげで、自分が習っていたことよりもかなり高いレベルの語学を教えることができたのですが、講義となると、堀川先生のようなやさしく、丁寧な教育をしてきたか、とやはり反省してしまいます。ただ、私は総人や人環の授業で、自分の専門領域に授業内容を集中させはしませんでした。私は、専門分野を「中国近現代政治思想史」と書くこともあるのですが、本当は「中国共産党史」が専門で、この領域には、ワシントン条約で保護されねば絶滅してしまうような数の研究者しかおりません（動物の場合と違って、だからと貴重だ、ということにはならないのですが…）。おまけに、学生の皆さんの興味を引くものとも思えません。また、学部でも研究科でも、中国や韓国など受講生には留学生が多かったものですから、東アジア近代における西洋概念の導入過程（たとえば日本人はchemistryを舍密〈せいみ〉

と音訳したが中国では化学と訳され、これが広まったといったこと——ちなみに総合人間学部は明治2年創設の化学研究機関・大阪舍密局の後身）ですとか、近世から近代にかけての時期に朝鮮と日本の知識人はお互いをどのように評価していたのか、といった比較的幅広いテーマを設定することに努めました。学部では、数名の受講生しかいなかった時期もあるのですが、そのときはそのときで、その数名の学生が3年間も3年半も続けて受講するものですから、少数ながらコアな支持者がいたのだと思えないことはありません。

このほか、私は、文学部が主宰するリレー講義「戦争と植民地をめぐる歴史認識問題」に出講しておりますが、ここでは「満洲国」の植民地支配や731部隊についての講義のほか、総合人間学部での講義を踏まえた近世東アジア関係について論じました。

こうして講義のことを振り返って見ますと、自分は好きなような授業をさせてもらえましたが、また学生のみなさんにも恵まれた十数年間であった、と思います。お詫びから始めて若干の自己満足、といった一文になってしまいました。まことに目汚しの文章、申し訳ありません。

（えだ けんじ）



総合館の院生研究室にて。2021年3月

ご退任を迎えられる先生方から

自由と寛容の精神



楽しい29年間だった。私ほど京大を楽しんだ人間はいないのではないかと、思うくらい楽しかった。特に何があったというわけではない。「京大的アホ」といえるような活躍をしたこともないが、第一に、なんといっても同僚に恵まれた。なかにはつきあいにくい人、困ったなと思う人がいないわけではなかったが、個の確立した人が多かったので、そしておそらく自分の仕事を真剣に追求されていたので、私のような人間にかまわず放っておいてくれた。能力に応じて働き、必要に応じて受け取る、だったか、私にとって京大は、その意味で理想の共産主義社会だった。いかに無能であっても非難されることはなく——ただ、揶揄されることはあった。研究室がお隣の江田さんに言わせれば、コンピュータに関する私の能力は旧石器時代の人間に相当するとのこと——巣穴に籠もった私をむりやり引きずり出す人もいなかった。私の29年間は自宅と大学を往復し、大学に着いたら、教室と演習室と会議室に出向く以外は研究室に籠もるというものだった。たまに廊下ですれちがって立ち話をすることはあったが、29年間で合計してもおそらく5時間に満たないだろう。働かない分、同僚にしわ寄せがいったのは間違いないが、それで嫌みを言われることもなく、私にとって京大は、というか人環は、自由と寛容の精神が支配する君子の共同体

大川 勇

(総合人間学部 国際文明学系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻)

だった。

第二に学生に恵まれた。研究室の院生が論客ぞろいだったため、木曜3限の院演習は教授会の日以外はいつもエンドレス、午後1時過ぎに始まる演習が終わるのはいつも暗くなってからだった。担当者の発表は1時間ほどで終わるものの、そこから始まる議論がいつ果てるとも尽きない。40代の私は院生と同じくらい元気だったのだろう。休憩も取らず、夜の8時、9時まで議論は続いた。50代以降はドイツ語のテキストを綿密に読む形式にしたため——これは議論以上に疲れる——さすがにそのようなことはなくなったが、院演習は疲労困憊、刀折れ矢尽きるまでやるものという記憶がいまも体に刻まれている。

学部演習では、研究室に所属していない学生との触れあいが楽しかった。前期、後期のはじめには、いつもなぜこの授業を取ろうと思ったのかを訊くのだが、なかには「いまどきこんな何の役にも立たないことをやっている授業があるのだと思うと、それに興味を惹かれて……」と言う実学系の学生もいて、そこから学問の有用性・無用性についての話を1時間することもあった。そういう学生が、学期の終わりにはリルケやムージルについて自分の視点から話しているのを聞くと、さまざまな志向を持つ学生が自由に泳げる場所を提供するという総人の理念はただの能書きに終わっているわけではない、という思いを強くした。

ドイツ語の時間は、これは無条件に楽しいものだった。初回のガイダンスでは、将来ドイツ語が

必要になるとも思えないさまざまな学部の学生にドイツ語を学ぶことの意義について話をするのが常だった。上述の学部演習とも重なるが、すぐ役に立つことしかやらないのだったら大学は要らない、大革命後のフランスは啓蒙の理念に基づいて高等専門学校を中心とする教育に舵を切ったがドイツはそうではなかった、有用性を優先する啓蒙の教育理念に反対するフンボルトという人がいて、この「札付きの自由主義者」が人間形成を最優先する理想主義に基づいてベルリン大学を作り、それが世界で初めての研究大学となった、その理念は講義よりもゼミナールを重んじるというかたちで具現したが、それを日本で初めて受容したのが京大だった……といった話を、初対面の挨拶代わりに学生にしたものだった。

こうした授業も最後の一年はオンラインを余儀なくされ、教室での授業と比べると言いたいことの半分も伝えられないもどかしさを覚えたが、それでもドイツ語クラスの1回生からは「先生の最後の年の受講生に滑り込むことができてラッキーでした」というメッセージが寄せられ、ヴァイニングとミュージルを扱った学部演習の受講生（5回生）からも「大学に入って初めて、大学とはこういう場所なのかと知ることができました」との言葉が届いた。最後まで、私は学生に恵まれた。

ひとつ心残りなのは、私の学生時代と比べて京大の自由度がかなり低くなっていることだ。私は大学に入ってドイツ語は田口義弘先生に、フランス語は山田稔先生に教わったが、両先生から直接肌で感じとったのは、大学という知的共同体の中では自分の意志に従って何をしてもよいという自由の観念だった。愛煙家であった田口先生は最初の時間に「煙草を吸う人は吸っていいですよ」と言っておもむろにご自身のパイプに火をつけ、山田先生は前期の試験で問題と解答用紙を配ったあと、「1時間後に解答用紙を回収します」と言って教室を去っていかれた。取るに足らないことではあるが、観念とはそのようなかたちで自然と表出

するものなのであろう。少なくとも私はそれを見て、ああ大学というのは高校までとはまったく別の世界なのだと感得した。その結果、私の自由は自堕落に直結し、ほとんど大学に足の向かない6年間を過ごすことになったが、あの無制限の自由は何ものにも代えがたい貴重な経験だった。いつだったか、総人にクラス担任制ができ、授業に出ない学生に声掛けをする話が出たとき、「学生には廃人になる自由もある、それを奪ってはならない」と柄にもなく強く主張したことがある。「もうそんな時代ではないですよ」と一蹴されたが、しかし私はいまでも内心でつぶやいている。「学生ニハ廃人ニナル自由モアル……」。

たしかに大学に出てこなければ京大に入った意味は半減するだろう。何よりも〈先生〉との出会いが失われる。私自身、学生には常々「大学は出会いの場である。君たちにとって一番大事なのは自分の〈先生〉を見つけることだ」とも言っているので、矛盾した言葉を弄しているようであるが、別に授業に出るのはいけないことではないので、そして出会いとは何よりも偶然のものなので、自分のやりたいようにやっているうちに自分の〈先生〉が見つかることもあるだろう。逆に、変なやつがいると認識した〈先生〉が、そんな君を見つけてくれるかもしれない。だから皆さん、せっかく京大に入ったのだから、思う存分京大の残りの少ない自由を満喫してください。私の知っているかつての京大と比べるとその自由度は大きくそこなわれたが、それでもまだ少しは残っている。自由の観念を体現している先生も少なからずいる。そういう先生と君たちの力でもう一度京大に「自由の学風」を取り戻して欲しい——それが29年間巢穴に籠もって、研究室に遊びに来た学生にしかこういう話をしなかった私が最後につぶやく言葉です。

（おおかわ いさむ）

ご退任を迎えられる先生方から

エッセンス・オブ・京大に触れた6年間

増井 正哉

(総合人間学部 文化環境学系／

人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



2015年4月に研究科・学部の仲間に入れていただいてから、文字通りにあっという間に過ぎた6年間でした。退職する時期になっても、まだよく知らないことがあるよう

な状態で、同僚の先生方、事務の皆様を支えられてきた6年でした。まず心からお礼を申し上げます。なにより、大学教員としての最後の6年を、45年前に大学生として第一歩をしるしたこのキャンパスで過ごせたことは幸せでした。私は工学研究科博士後期課程を終えてから1986年から7年間、工学部建築学科で助手として勤務し、1993年から奈良女子大学生生活環境学部で22年間を教えたあと、久しぶりの京都大学勤務でした。退任を迎えての思いは、ながく研究科に在職されて退職される先生方とは、おそらく少し違ったものだと思います。

研究科への異動が決まった時、いただいた6年をアカデミックなまとめの期間にしたいと強く思いました。前任校では、大勢のゼミ生に研究テーマと資金を提供するプレッシャーもあって、多くの研究を併行して進めてきました。私が大学教員になった1980年代後半からは、専門とする歴史遺産の保存・活用についての社会的な関心が高まり、実際のプロジェクトの数も拡大しましたが、専門研究者の層がうすい時期にあたりました。あちらの町並みにこちらの史跡と、委託事業は途切れなくあり、歴史調査・保存修景計画の作成・その後の維持管理の流れのなかで研究テーマを見つける

ことが面白く、来る者は拒まずの姿勢で体力の続く限りの研究活動でした。実際の保存・活用を通しての社会貢献に加え研究の成果もあがったのですが、こうした成果をアカデミックにまとめたいと思いをもちながら走り続けました。京大での6年でそのことに取り組むつもりでの異動でしたが、結局、定年後に持ち越してしまいました。

1点だけ誇らしい学術的な成果は、「研究資源アーカイヴ」事業と「人文・社会科学の未来形発信」事業の支援をいただいて、ながく取り組んできたパキスタンにおける仏教遺跡の発掘調査と保存修復の記録を整理し目録化して、人文科学研究所に収蔵させていただいたことです。私は、1983年から京都大学ガンダーラ仏教遺跡の総合調査学術調査隊（隊長・西川幸治工学部教授）の隊員として10年間、パキスタンの仏教遺跡の発掘調査を行い、その後、ユネスコ信託基金による仏教遺跡の保存修復の責任者としてまた10年間、パキスタンで仕事をしました。発掘調査では一番下っ端の隊員でしたが、本学に籍を置かせていただいたことで、1950年代に始まる京都大学中央アジア調査系譜に連なる貴重な研究資源を次世代に残す責務を果たすことができました。遺跡の発掘調査からその保存修復まで一体的なアーカイブであることが大きな特徴です。隊長が退職された後、調査資料は隊員それぞれの手元に移動してしまい、それを集めることからスタートでした。資料の内容は、写真、遺構・遺物の実測図、調査日誌、事務書類などで、発掘調査を撮影したカールスライドだけで2万カットを超える分量です。退職ぎりぎりまで整理作業に追われることになりましたが、無事、

目録化と一部のデジタル化も終了し、資料は人文科学研究所の収蔵庫に収めることができました。

研究科・学部での教育は、最後まで手探りになってしまいましたが、全学共通教育を担うことが研究科の大きな特質であり、また強みであることを改めて感じました。それぞれの専門分野の教育・研究を行いながらの共通教育は、たしかに時間的に大きな負担ですが、自身の研究の先端的な部分を共通教育として語ることは、研究へのフィードバックも大きいと感じました。とくに私のように、工学部助手以来、専門家養成のための専門教育しか経験のない者には、新鮮で有用な経験でした。担当した基礎論的な「都市空間論」では教科書的な内容になりましたが、後期の応用である「都市空間保全論」は、自身が関わってきた保存・修復のプロジェクトだけで授業の構成を組み立てました。専門的・先端的な部分の言語化と視角化の作業は負担でしたが、実践的な取り組みを論理的な整理をすることができました。

演習では、共通科目・総人科目とも、実践的な課題に取り組んでもらおうと、対象地区を選んで、地元の自治体・住民の皆さんとの協働作業を始めたのですが、集合時間に現れない学生、見学の途中でいなくなる学生、地元の方の説明にまったく興味を示さない学生、極めつけは「集合時間に遅れました、追いつきます」と連絡をくれながら、「途中で〇〇を見つけたので、そちらに行きます」と他所へ行ってしまった学生。学期最後に設定した地元でのプレゼンも地元の方からも遠まわしな表現でしたが「これが京大生のプレゼンですか」と言われる始末。これに懲りて、次年度からは演習の形態を変えました。ただ、共通教育の演習では、少人数グループでの都市空間の分析・課題抽出と計画提案の作業を課しましたが、所属学部ごとに学生の関心が異なり、課題がまとまっていくプロセスを見るのが楽しみでした。このように京大生「らしい」振る舞いには驚くこともありました。が、都市空間という身近な対象にそれぞれの関心で向き合う学生を指導するなかで、実学的な側面が強い自身の専門領域と共通教育の接点を見い

だすことができました。

このように慌ただしく試行錯誤で過ごした、この短くも充実した在職期間を括るとすると、「エッセンス・オブ・京大に触れた6年」に言い尽せません。「エッセンス・・・」は、短期ではありますが、国際協力銀行からインドのウツタル・プラデーシュ州（通称 UP 州）に派遣された時に心に残ったコピーです。仏教遺跡を活用する観光開発計画の支援での派遣でしたが、UP 州政府が州の観光プロモーションに使っていたコピーが、「エッセンス・オブ・インド」でした。祇園精舎・タージマハル・ヴァラーナシーなど、インドを代表する観光地が存在するだけではなく、インド文化を形成する様々な文化的基層に触れることができる州の紹介として、このコピーが使われていました。文化的な重層性が、わかりやすく魅力的であればこそ、自らの州をエッセンスとして誇ることができる、カウンターパートだった州の若い職員が語ってくれたことを思い出します。

研究科で過ごした期間は短かったのですが、その分なおさらに、いろいろな意味で京大の基層文化を感じる六年間でした。この研究科では、多様な分野の研究者が、個々の個性を競いながら文字通りの学際的環境で活動されておられます。また、学生たちも、それが個々の関心に従って学生生活を送っています。こうした多様性・重層性は、京大の特徴として自明のこととも言えるでしょう。ただ、卒業生であり、卒業後も関わりを持ちながら大学人として過ごしてきた私は、これまであまり意識することはありませんでした。他大学で過ごした時間がながく、短い在職期間だったからこそ、強くエッセンスを感じたのかも知れません。

こうした強みを活かしながら、研究科が発展されることをお祈りしています。

（ますい まさや）

ご退任を迎えられる先生方から

「大地変動の時代」に入った日本列島で賢く生き延びるために

鎌田 浩毅

(総合人間学部 自然科学系／
人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



1997年に総合人間学部教授を拝命して足かけ24年になるが、自己紹介と今後の展望を述べたい。生まれと育ちはよちようまち余丁町で、近所のぬけべんてん巖嶋神社(通称、抜弁天)でガ

キ大将たちと日が暮れるまで遊んでいた。

筑波大学附属駒場に中高6年通って東大に入ったが、数学で零点をとったため「進学振り分け制度」で行けるところがなく駒場に3年いた。そして全く知識も関心もなかった理学部地学科に辛うじて進学したが、落ちこぼれを許さない本郷の厳格な教育に合わず、サイエンスからさっさと足を洗おうと就活してやっと入れてもらったのが通産省(現・経済産業省)地質調査所という地学の研究所。つまり逆戻り。

仕方なく行かされた出張先で出逢った火山で、突然人生が変わった。阿蘇山から噴出したマグマが九州全域を焼き尽くすのみならず、火山灰は遠く北海道まで飛来し10cmも積もったという。

人なつこいオジサンが阿蘇カルデラの岩石を手に取り、9万年前の巨大噴火をまるで昨日見てきたかのように熱く語る。私はいっぺんに火山が好きになり、大学時代ロクに学ばなかったことを深く反省し勉強を10倍速で開始した(このオジサンは世界的火山学者の小野晃司博士と判明し、以後ずっと私の師匠となる)。

18年ほど野山を駆け巡って41歳で京大に着任した時には「こんないい大学があったのか!」と、かつて何も考えずに東大に行ったこと(同期160

名から130名入学)を後悔した。いえ、東大が悪いと言っているのではなく、私にはあのキチンとした学校が合わなかっただけです。よって、学生と院生には「折り目正しい教育を受けたかったら修士もしくは博士から東大に行くとい。僕は断然京大が合ってるけどね」と講義で語ってきた。

さて京大で「水を得た魚」となって驚いたのは、学生たちの劣等感が強いことだった。高校まで数学トップを続けた学生は、自分よりできる同級生に出会って衝撃を受けた。しかし、その同級生は未来の森重文教授(フィールズ賞受賞、1990年)かもしれないのだ。そういう若者がゴロゴロいる京大で学べる幸せに、まず目を向けてほしい。

こんな学生の悩みに答えるため、「地球科学入門」の講義で白い紙を用いたQ&Aを始めた。授業の終盤で学生たちはペンネームで質問・感想・意見を書き込み、次の時間に私はどんな質問にもひるまず回答する。匿名性と即興性から思いもかけぬ「一期一会」が生まれる時間だった。

やってみると彼らが時間の使い方を知らないことに驚いた。もちろん京大に合格するだけの「時間術」はあるが、プロの研究者から見ると何とも歯がゆい。そこで授業中に「時間の戦略」の話をしたら、面白がってくれた学生から「先生、それ本にしてください!」と言われて出した最初のビジネス書が、『成功術 時間の戦略』(文春新書、2005年、現在8刷)である。

さらに、卒論の提出間際に悪戦苦闘している学生が可哀想になり、「最小の努力で最大の成果」を出す論文の書き方を、2冊目の『ラクして成果が上がる理系的仕事術』(PHP新書、2006年、7刷)

で指南した。ちなみに、デジタル時代に合わせて全面改定した後者の新版『ラクしてゴールへ！理系的アタマの使い方』（PHP 文庫、2021 年）を、何とか定年に間に合わせたという次第。

さて、大学の教養課程で教えるべき内容には、コンテンツ（内容）とノウハウ（技術）があると常々考えている。私の場合コンテンツは地球科学で、ノウハウが勉強法、読書術、時間術、人脈術、知的生き方などに当たる（やはり学生の希望に応じて本にした）。その地球科学に関して、昨今の学生・院生たちのリテラシーが余りにも低いことに私は愕然とした。それは近い将来の日本人全員に関わる重要な問題なので、詳しく述べてみよう。

日本列島は 10 年前に起きた東日本大震災以来、地震と噴火が頻発する「大地変動の時代」に突入した。中でも 2030 年代に起きる「南海トラフ巨大地震」が喫緊の課題で、九州から関東までの広い範囲に震度 7 の大揺れと巨大津波が襲ってくる。国の想定では犠牲者の総数は 32 万人を超え、全人口の半数に当たる 6000 万人が被災するのだ。

太平洋ベルト地帯を直撃することは確実で、被災地域が産業経済の中心であることを考えると東日本大震災よりも一桁大きい「激甚災害」となる。

また、経済被害は 220 兆円を超えると試算され、東日本大震災の被害 20 兆円の 10 倍以上になることは必定だ。これは 1 年間の全租税収入の 4 倍を超えるともんでもない額でもある。

一方、伝えられた被害想定が日常からかけ離れて大きいので、多くの国民は具体的なイメージすらできない。たとえば、最大高 34 メートルの津波が 2～3 分で襲ってくると言われても、どうしてよいか見当も付かないのである。

残念なことに、南海トラフ巨大地震の発生する「日時」を正確に予知することは、最先端の地球科学でもまったく不可能だ。そこで政府の中央防災会議は地震の発生確率を公表し、30 年以内に発生する確率を「70～80%」とした。

実は、この伝え方に大きな問題がある。というのは、地震発生確率で示したのでは緊急性が伝わらないからだ。一般市民だけでなく地球科学の専

門家にとっても身近でないため、準備が困難である。

そこで私はあることに気がついた。実際の社会では「納期」と「納品量」で仕事が進む。つまり、いつまでに（納期）、何個を用意（納品量）という表現で言われなければ、誰も主体的に動けないのではないか。

そのため、私は 2 項目に絞って伝えることにした。①南海トラフ巨大地震は約 15 年後に襲ってくる（2035 年±5 年）、②その災害規模は東日本大震災より一桁大きい。一方、もし人々が自発的に避難すれば津波の犠牲者を最大 8 割まで減らすことが可能で、さらに建物の耐震化率を上げれば全壊も 4 割まで減らせる試算がある。

東日本大震災で問題となった「想定外」をなくすには、こうした情報が「常識」にならなければならない。まさに英国の哲学者フランシス・ベーコンが説くように「知識は力なり」。私が講義で学生たちに真っ先に伝えたいコンテンツでもある。

こうして私は「科学の伝道師」を標榜し、「自分の身は自分で守る」際に必要な情報を学生と市民へ伝えることを本務に加えた。ハンディな新書版で地震火山の啓発書を書き、赤い革ジャン（マグマの赤）を着ながらテレビ・ラジオ・ネットで何がポイントかを分かりやすく語ることにした。

加えて日本が直面する課題には、首都直下地震と富士山噴火の二つがある。近著の『首都直下地震と南海トラフ』（MdN 新書、2021 年）と『富士山噴火と南海トラフ』（ブルーバックス、2019 年）では、初心者にも最後まで読めるように腐心した。

その富士山は前回の 1707 年、南海トラフ巨大地震（宝永地震）に誘発されて 49 日後に大噴火した（宝永噴火）。こうした災害予測研究とアウトリーチ（啓発・教育活動）は、4 月着任の京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授でも続行したい。

人環という素晴らしい環境で 24 年間ノビノビと仕事をさせていただき、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

（かまた ひろき）

故 石原昭彦 教授 追悼



在りし日の石原昭彦先生
多くの石原研卒業生の写真に囲まれて。
人間・環境学研究科棟 406 実験室に貼られていた石原先生のポラロイド写真。

石原昭彦先生のご逝去を悼んで

神崎 素樹

(総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

共生人間学専攻 認知・行動科学講座 行動制御学分野教授の石原昭彦先生は2020年3月20日ご病気のためご逝去されました(享年61歳)。謹んで石原先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

石原先生は、教養部保健体育教室助教授として1990年4月着任されました。1992年総合人間学部助教授、2003年人間・環境学研究科助教授、そして2005年以降、人間・環境学研究科教授として在職されていました。人間・環境学研究科開設(1991年4月)、総合人間学部発足(1992年10月)、教養部廃止(1993年3月)、高等教育研究開発推進機構の設置(2003年4月)、そして国際高等教育院の設置(2013年4月)と総合人間学部および人間・環境学研究科にとって激動の時代に30年間京都大学にお務めになりました。そして、2020年4月17日、従四位瑞宝中綬章を受賞されました。

石原先生のご専門は、細胞生物学および生命科学です。特に、宇宙環境への滞在によって生じる神経筋の変性を抑制するためのメカニズムの解明に情熱を注がれ、日本宇宙生物科学会評議委員、宇宙航空研究開発機構宇宙環境利用科学委員会委員、宇宙航空研究開発機構宇宙科学運営協議会運営協議員、宇宙航空研究開発機構有人サポート委員会(宇宙医学研究推進分科会)専門委員、宇宙航空研究開発機構小動物実験装置アドバイザー委員会委員の要職を務め、我が国の宇宙医学研究を牽引されてきました。国際学術雑誌の掲載数は183件(1985年～2020年)にのぼり、その大部分が筆頭著者および責任著者であります。 h -indexは30であり、石原先生の論文は多くの生命科学者に引用されています。そして2003年、NASA Ames Research Center Life Sciences Divisionより Award for contributions to the STS-107 fundamental space biology program experiments を受賞され、宇宙医学研究において名実ともに世界の Ishihara となりました。

私事になりますが、2007年人間・環境学研究科に着任以来、石原先生に宇宙研究の楽しさや難しさ、そして素晴らしいさをご教授いただき、JAXA(宇宙航空研究開発機構)やNASA(アメリカ航空宇宙局)での宇宙生命科学研究に携わることができました。宇宙研究に関わっている研究チームは世界中に沢山あります。しかし、NASAで実際に実験研究を行うことができるのは極僅かな研究チームだけです。その中で、宇宙滞在から帰還後に宇宙飛行士の身体を調べることができ、さらに帰還後最初に宇宙飛行士の測定ができるのは京大石原チームなのです。それ故、石原先生を中心とする京大人環研究チームは宇宙に一番近いと言われています。2020年3月12日の教授会で「神崎君、京大の宇宙研究をよろしく頼む」と石原先生に言われ、それが石原先生との最後の会話となりました。石原先生の意志を受け継ぎ、京大の宇宙研究を継続していきたいと強く思っている次第です。



パラボリックフライト実験にて(2014年1月30日)。
上段右から3人目が石原先生、5人目が永友先生。
下段右から1人目が神崎、3人目が萩生先生。

石原先生のご逝去を悼んで、旧教養部保健体育教室時代から石原先生とご一緒に仕事をされてきた田中真介先生より、石原先生と公私ともに最も親しかった久代恵介先生より、石原先生の一番弟子である永友文子さんより、認知・行動科学講座 行動制御学分野の若手研究者である萩生翔大先生より追悼文を寄稿いただきました。この追悼文が石原先生との思い出をいつまでも色褪せないための一助となることを願っています。

(こうざき もとき)

可惜夜に

～故石原昭彦教授、熱意と楽しさと好奇心と～

田中 真介

(国際高等教育院／

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

●少年の志

石原昭彦先生がお亡くなりになった2020年3月20日の夜半、京都東山の山稜の上に広がる澄んだ夜空には、新たな門出の刻を迎えたことを語りかけるかのように美しい三日月が静かに輝き、ゆっくりと時を刻んでおりました。

石原先生は1958年の秋に岐阜市に生まれました。スポーツ好きの少年は思春期にどんな恩師に出会ったのでしょうか。運動することの魅力、そして健康な心と体をつくることの大切さを子どもたちに伝えたいという志が受けとめられて、1977年に岐阜大学教育学部に入學され保健体育学を専攻されました。

卒業後には、運動生理学をさらに専門的に学ぶために筑波大学大学院体育科学研究科の5年一貫の博士課程への進学を決意され、神経・筋に関する運動生理学・組織化学を専攻されて、5年間のあいだにその基礎から応用に至る広範な勉強と研究に取り組まれました。

1986年に修了後、徳島大学教養部の講師・助教授を務められたのち、1990年(平成2年)に京都大学教養部に着任されます。教養部は1992年に総合人間学部に変更され、1994年からは大学院人間・環境学研究科で教育・研究活動を担われました。

...

●細胞から宇宙へ

研究分野は神経・筋系の生理学で、大学院の頃から次の研究テーマに取り組まれました。1)「神経・筋の組織化学的特性」：筋線維や脊髄運動ニューロンの可塑性、代謝の改善・向上のしくみ、2)「発育・成長期から高齢期に至る発達過程での神経・筋の分化と適応」：発育過程での筋線維の組織化学的な分化、老化にともなう筋線維の萎縮・減少、3)「運動や新環境による筋・神経系の変化」：運動活動また高濃度酸素による筋線維の組織化学的特性の変化。

とくに近年は、酸素濃度と気圧を制御できる「酸素カプセル」を開発して、健康・体力の維持および各種疾病の予防・改善研究に取り組んでこられました。それが宇宙環境への生体適応の基礎研究として活かされるに至っています。

軽度な高気圧・高濃度酸素の環境を用いて、健康・体力を維持・増進し、病気に強い体を作ること(免疫機能や抵抗性の向上)、また美容効果、アンチエイジング(抗加齢)、不妊症の改善、メタボリックシンドロームや生活習慣病の予防・改善といった多彩な研究が展開されました。これらの成果は、新たな健康支援やスポーツ指導の実践活動に結実しています。

...

●ふわっと

私は1987年に教養部に助手として着任しておりました。1992年に新設された総合人間学部では専門の実験

実習もスタートし、石原先生と私はペアで「生体適応論実験」という科目を担当しました。石原先生が「解剖学および組織化学実験実習 ～ラット骨格筋の薄切標本の酵素組織化学染色と画像分析～」私が「発生生物学・遺伝学・生態学基礎実験実習 ～メダカの人工受精技術と環境条件操作～」でした。

石原先生の手作りの実習書の表紙には、宇宙飛行士の毛利衛さんが乗り組んだ時のスペースシャトルのバッジの絵柄がデザインしてあって楽しかったです。バッジには「weightlessness」(無重力)を表す日本語として「ふわっと」と書いてあって笑いました。宇宙への憧れと楽しさが伝わってくる表紙でした。

石原先生の実習書には、導入に次の一文がありました。『実験・実習は、「熱意」を持って「楽しく」行うことが一番である。また、「好奇心」や「興味」が知識を広げ、実験をおもしろくする。解らないことがあれば納得いくまで質問して、または自分で調べて、どうしてこのような実験をするのかを理解してほしい。実験・実習だといって軽く考えるのではなく、積極的に行動して、びっくりするような大発見をしてほしい』。

シャープな一文ですが、発見の喜びによって研究をすすめていってほしいという願いが込められているように感じます。吉田南総合館(旧A号館)1階の中庭の見える実験室でのこの実験実習の時間は、私にとっても新鮮な胸の波打つ貴重な経験となったとても楽しいひとときでした。

...

●可惜夜(あらたよ)に

石原先生は優しくて前向きで、努力家でした。最初の酸素カプセルはほとんど手作りだったように思います。研究の初期には私も被験者になってカプセルに入らせてもらったことがありました。カプセルの中で熟睡したりして笑われました。

ある夜、自宅に呼んで、缶ビールを次々と出して振舞ってくださったことがあります。話があたたくて楽しくて、時の経つのを忘れてしまいました。明けゆくのが惜しい夜でした。研究分野としては近かったのですが、同世代ということもあって、仕事とは別に気楽に話を交わすことの方が多かったように思います。

石原先生は、足の調子がいまひとつのときにも、「1日1回、吉田山まで歩いてるんよ」と笑顔で話してくださって、「がんばってるんやなあ、ええことやなあ」と話したことを思い出します。いつも私の方が励まされていました。

娘さんに赤ちゃんが生まれて、「孫ができたんよ」ととてもうれしそうな表情だったことも忘れられません。ご家族が、そして多くの仲間たちがとても大きな支えとなっておられました。

未来への願いは時を越えて受け継がれ、熱意と楽しさと好奇心の力、そしてその深い優しさに包まれた大きな夢は、新たなまた新たな次の世代の子どもたちを支え導き、一人ひとりの命の営みを温かく励ましていくように思われます。

(たなか しんすけ)

石原昭彦先生を偲んで

久代 恵介

(総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

石原先生をはじめてお見かけしたのはいまから17年前、定例の講座会議の席上でした。会議のあと、ご挨拶を済ませると、「うんうん、〇〇先生から聞いてる聞いてる、よろしくたのむよ」と私の恩師の名前をあげながらニコニコ笑顔で返してくださいました。その瞬間につくられた私の中の石原先生は、いまもまったく変わっておりません。石原先生は程なく私のことを「くーちゃん」と呼んで親しく接してくださるようになり、右も左もわからぬ私のこころ強い後ろ盾になってくださいました。助手として赴任してしばらくの間、私は精神的にまいっていたのですが、石原先生は私をたまに研究室に呼んでは、とりとめのないおしゃべりをしてくださいました。それが私にとってどれほどありがたかったことかと思ひ出されます。「病むときはとことん病んだらええんよ」というお言葉で救われた気がしました。その後も、研究環境のままならなかった私の状況を案じ、准教授公募を応援してくださったことは、今でも本当に感謝しております。

石原先生から学んだことはたくさんありますが、私のこころにとくに強く刻まれているのは、周囲の人間を大切に、あたたかい空気で包み込むということだったと思います。事務の方、業者の方、講座の後輩たちに対してはいつもあたたかく接しておられました。また、私なら追い出してしまうようなやんちゃな学生をも受け入れ、「くーちゃん、今日、研究室の〇〇さんに××とか言われてもう泣きそう～」と、研究科会議で向かいに座る私に嘆いておられたお顔は、どこか幸せそうな笑みであふれていました。晩年は、ご病気を患われながらも人生を謳歌されているご様子で、「くーちゃん、昨日、祇園で松葉杖忘れてきちゃってさ～」と、ユーモアたっぷり周囲を和ませてくれたこともありました。石原先生のあたたかいお人柄が偲ばれるエピソードが連なって思ひ出されます。

一方で、石原先生は、人を育てるということにとっても強い意志をもって臨まれていたように感じております。修士・博士課程を石原研で学び究め、我が講座で助教を務められた永友文子さんへのご指導はとりわけ厳しかったように思ひ出されます。私は石原研学生の副査を務めさせていただくことが多かったのですが、報告会の席上、私の質問に答えられず困惑する永友さんに対して、「自分で考えて教えてください」と厳しい口調で言い放たれたことがありました。毅然としたそのお姿が、私の中の石原先生とあまりに乖離しており、強く印象に残っております。その一方で、就職先が内定し、研究活動に本腰を入れようとしない4回生の卒論指導では、(私なら研究室から追い出してしまうところ)大きなおこころで根気強く指導されていました。また、石原先生は長年、学生生活委員会において就職担当教員を担われ、学部の推薦を希望する学生一人ひとりに推薦状

を書かれるなど、たくさんの学生を社会に送り出すことに尽力されました。これらはすべて同じおこころざしによるものだったと感じています。

石原先生がおられなくなったいま、石原先生が遺してくださったものをしっかりと受け取り、それを次の世代へとお渡しすることが私の使命のひとつと思っております。結局石原先生にはなにひとつお返しすることができませんでしたが、いただいたご恩を次の人たちへとお返ししていけるよう、これからの日々を過ごしてゆきたいと思っております。胸いっぱい感謝の気持ちとともに、石原先生が安らかにやすみになられることをお祈りしております。

(くしろ けいすけ)



津田謹輔先生のご退職をお祝いする会にて

(2013年3月19日)。

上段右から林先生、石原先生、田中先生、神崎先生、月浦先生、齋木先生、弓削さん、久代。下段右から船橋先生、津田先生、森谷先生。

石原昭彦先生を偲んで

永友 文子

(認知・行動科学講座 行動制御学分野助教
[2013年～2015年度在籍])

「研究の道はいばらの道で、血反吐を吐いても這いつくばって、やっていかなくてはいけない。厳しく大変な道です。本当にやっていけますか。研究者を育てるってことは、私も人生を懸けているんです。あなたに覚悟はありますか。ないなら、今この場で辞めてください」研究者になりたいという私に、石原先生が院試の面接の最後におっしゃった言葉です。鬼気迫る表情と厳しい口調に私は一瞬で凍りつき、先生の言葉の重さを噛みしめたと同時に、絶対に研究者になるのだと決意を強めたことを覚えています。

石原先生は穏やかで、話の端々にジョークを仕込んで皆を笑わせ、場を和ませる面白い先生でしたが、教育・研究に関しては非常に厳しい先生でした。私なども、これ以上ないほど努力しても「努力が足りん!」と叱られ、何度悔し涙を流したかわかりません。しかし、そんな先生の厳しさは不思議と温かさに満ちていて、それは、甘さではない真の優しさをもって、研究だけでなく、学生一人ひとりの人生にまで真剣に向き合っておられたことの表れであったと思います。そして、こうした厳しさは、ご自身に対しては一層厳しく向けられていた

ように感じます。日々、寸暇も惜しんで懸命に研究に取り組まれる先生を見るたび、一步でも追いつきたい！という気持ちが自然と湧いたものです。

そんな師匠の背中を追いかけながら、私は何とか研究者になり、認知・行動科学講座の助教として働いていましたが、結婚を機に京都を離れ、嫁ぎ先の仕事を継ぐために、職を辞することになりました。悩んだ末のその決断をお伝えしたとき、「片腕をもぎ取られるようや」とおっしゃった石原先生の顔は、今でも忘れられません。私のような出来の悪い弟子を片腕とまで思ってくださっていたのだと知り、自分を誇らしく思えたと同時に、何とも言えない苦い気持ちが胸に突き刺さり、非常に辛い別れとなりました。その後、紆余曲折ありましたが、最終的には私の選んだ新たな道を応援してくださり、京都に帰省した際に研究室を訪ねると、先生のご体調を心配する私に「人の心配より、自分は？」と、色々と人生相談にまで乗ってくださいました。いつもご自身のことより周りのことを考え、多くの人の心に寄り添われていた、そんな先生だったと思います。学問だけでなく、先生のお心から学んだ多くのことは、私の人生の礎として、これからも大きな支えとなるでしょう。晩年、先生はよく「弟子はいつか師匠を超えていくものや。早よ追い抜いて行かんと」と、おっしゃっていました。どのような形になるかわかりませんが、先生の教えを生かし自分の人生をしっかりと歩んでいくことが、この言葉に答えること、そして、先生への恩返しになるのではと思っています。人生の師に出会えたご縁に感謝し、石原先生のご冥福をお祈りいたします。

(ながとも ふみこ)

石原昭彦先生が大切にされていた 宇宙研究

萩生 翔大

(総合人間学部 認知情報学系／
人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

石原先生、謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、宇宙研究での先生との思い出を書かせていただき追悼とさせていただきます。

石原先生との出会いは2007年の春、私が大学一年次に受講した体力医科学の講義においてでした。高圧酸素カプセルや微小重力環境下での神経筋適応に関するお話をしてくださり、ゆっくりとした丁寧な話口調からその優しいお人柄を感じたのを記憶しています。特に印象的だったのが、ワニが長時間水中に滞在できるのは血中ヘモグロビンの酸素解離度が非常に高いためであり、ヒトでも稀に同等の能力を有したヘモグロビンを持つ家系があるというお話でした。10年以上前に聞いた講義ですが、今でも当時受けたインパクトを鮮明に記憶しています。その後、博士の学位取得時まで副査の先生として多大なるご指導をいただきました。

先生との交流の機会が増えたのは修士課程在学時の

2012年に始動した、宇宙研究を通してでした。石原先生と当時の指導教官であった神崎先生がともに共同研究者(CI)として携わることになった宇宙実験プロジェクトに、学生ながら参加させていただきました。本プロジェクトは、宇宙飛行士を対象に長期宇宙滞在前後の生理学・運動学データを取得し、微小重力環境下での身体運動適応を解明する目的で実施され、石原先生は歩行時の下肢の血流測定と分析を担当されました。宇宙実験はNASAでの長期にわたる宇宙飛行士の測定のみならず、実施するまでの予備実験と審査期間が非常に長く、先生とは何度もJAXAまで出張をし、一緒に実験をしました。その度に食事にも連れて行ってもらいましたが、居心地がよいお店やユーモアに富んだお店をたくさん知っておられたのが印象的でした。食事の席では、私が納得のいく形で宇宙実験に関わっているかどうかをしきりに心配してくださり、他の共同研究者の先生方に意見を代弁してくださったこともありました。実験手順に関する方針や議論がチーム内でまとまらなかった際は、石原先生が一言意見を述べられるだけで解決したということもしばしばあり、これまで長く宇宙研究に携わり築いてこられた石原先生と共同研究者の先生方、JAXAの方々との信頼関係が窺えました。石原先生がいてくださるから宇宙研究ができるのだということを強く感じていました。また、先生はいつも笑顔で楽しそうに実験をされていましたが、実験に対する1つ1つの所作や時折示されるご主張から宇宙研究に対する強い使命感と責任感が垣間見えました。長い間大切にされてきた宇宙研究に対する情熱をそばで感じることはできませんでした。

生前最後に書かれていた本宇宙実験に関する論文が宇宙研究の国際誌に採択されたとの知らせが来たのは、先生がこの世を去られた後でした^(注1)。最期に宇宙研究におけるご自身の責任を全うされた石原先生を敬服いたします。その後報告会を経て、10年近くに渡った宇宙実験プロジェクトが無事に完了しました。できれば報告会の後、直接感謝の気持ちをお伝えしたかったです。

現在新たな宇宙実験プロジェクトが始動しており、今度は私もCIとして研究に携わっています。石原先生からは生前、次は若いメンバーに主導的に進めてもらいたいと仰っていただきました。道を繋いでくださったことへの感謝と同時に、一層の責任を感じています。宇宙実験を進めていく難しさを感じる場面も多々ありますが、ふと先生のことを思い出すと、もう少し頑張ろうという気持ちになれます。今でも見守っていただき、励ましていただいているという思いがしてなりません。

石原先生、今まで多くのことを学ばせていただき、どうもありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

(はぎお しょうた)

注1 : Ishihara A, Terada M, Kouzaki M, Hagio S *et al.* Blood flow in astronauts on Earth after long space stay. *Acta Astronautica*. 175, pp.462-464 (2020).

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第66号をお届けいたします。
今号では、この3月末をもって退職される6名の先生方から御挨拶を頂戴しました。長年の御功勞に敬意を表し、深く感謝申し上げますとともに、益々の御健勝と御発展を祈念いたしております。

また、教養部時代の1990年4月に着任され、2020年3月20日に急逝された石原昭彦先生を偲び、御功績を振り返る機会を設けたいと思い、石原先生と関係が深い先生方から追悼文をお寄せ頂きました。そして、ここに謹んで石原昭彦先生の御冥福を心よりお祈りいたします。(A・T)



熊本県鍋ヶ滝での野外実習。
9万年前の阿蘇カルデラ噴火を観察

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会